

そ はじ まも しるし ふく じつ ゆうしひとり いさ きゆうぐん い  
夫れ始めを保るの徴は不懼の実なり。勇士一人、雄みて九軍に入  
る。将に名を求めんとして能く自ら要むる者にして、而も猶お是  
くのごと しか いかん てんち かん ばんぶつ おさ ただ ろくがい ぐう  
の若し。而るを況や天地を官し万物を府め、直ちに六骸を寓と  
じもく しょう ち し ところ いち ころいま かつ し もの  
し耳目を象とし、知の知る所を一にして心未だ嘗て死せざる者  
をや。かれは ひ えら とうか ひとすなわ こ したが かれは なん  
ぞ肯えて物を以て事と為さんやと。

【大体の意味内容】

そもそも物ごとの始原を心の土台に保っていることの表徴は、どんなことに対してもびく  
びくと懼れおののかないという実質のことである。勇敢な戦士はたとえ一人であっても、  
いさましく敵の大軍に突入する。名誉を欲しがる程度の者であっても、徹底してそれに  
執着するならば、そのように死の恐怖に打ち勝つこともある。ましてや、天地の摂理に  
則り、万物をすでに我が財産とわきまえるならば、今灯っている一瞬の命が尽きること  
や何かを喪うことを懼れたりはいしない。頭・胴体・両手・両足の六骸といった、一個人  
の身体は、生命の実質にとつては仮の宿りに過ぎず、目に映り耳に聞こえるものは一時的  
な形象と知れば、この世界に固執すべき理由はなくなる。知性による様々な認識は所詮  
統一的なところから派生したものに過ぎないと看破し、金銭地位確保のために心を殺して  
しまうというこのない者ならば、いったい何を懼れるということがあろうか。あの王駘  
はいずれ自ら日を選んで昇天するであろうが、多くの人々はそれにもつき従ってゆこう

とするであろう。そのような人物が、どうして自分の成功や人気取りのための策略などめづらしたりすることがあるのか、そんな卑俗な欲求とは全く無縁の人なのだ。

前々回の「足切りの刑」を受けた聖人、王駘の話の3回目最終回です。

前科者で身体障害者でもある王駘が、学習塾経営者として大成功を収めていることに、何か秘密の戦略があると疑っている常季に対し、そのような勤練りは無用だと孔子が論じているわけです。

何か罪を着せられてその刑罰で身体欠損者となり、おそろくは地位も名誉も財産もすべてを失った王駘は、その後は天地万物と一体となり、既にそのすべてが自分の財産であると感得したのでしよう。失うものはなく、あらゆるものを豊かに持っているのだから、いっそ何かを欲する必要はない、と。前に紹介した手塚治虫の漫画『火の鳥 鳳凰編』の我王を彷彿させますが、案外、我王のモデルが王駘なのかもしれませんね。

山の中で狩猟生活をするマタギは、商売道具である鉄砲と山刀、水筒、火起こし道具以外はほとんど何も持たず、ほぼ手ぶらに近い状態で何日も山中生活をするそうです。その何日間分の食料はどうするのかと問えば、「山自体が食糧の宝庫なのだからなんてわざわざ重いものを持って食糧を担ぐ必要があるのか」と呆れられるそうです。山菜、キノコ、沢の魚、ウサギや蛇、山鳥などの小動物の肉、文字通りの食い物の山に入るのだから、と。

ではマタギは、寝るのにどうやって天露や風を防ぐのか？

「大きな笹でもあればそれを組み合わせるべくに天幕は結上げることができぬ。枯れ葉や草で



布団などで寝るのにこれが案外温い」。現代でもこんな生活をできる人々がまだ生き残っているのです。知恵や知識、技能があれば、金はなくても実に豊かな生活ができて。

「天地万物の官府」という、自然との一体化。その極意を、ぜひ多くの人々、我々にも伝授してほしいです。